

これからの日本 OR 学会に向けて

# 日本 OR 学会への期待とエール

木嶋 恭一

日本 OR 学会創立 60 周年、誠におめでとうございます。

そのような慶事に際し、同じく FMES（経営工学関連学会協議会）や横幹連合の一翼を担う経営情報学会を代表して、貴学会のこれまでの学術的・社会的貢献に深い敬意を表するとともに、今後への期待とエールを寄せさせていただくのは大きな喜びです。

私は個人的には貴学会の古くからの会員で、貴学会とはこれまで個人的・公的な関わりも長く、それを振り返るとき、自ずと貴学会への敬意と期待・エールが湧き上がって参ります。

## 1. 論文投稿と機関誌特集号を巡って

東京工業大学大学院理工学研究科博士課程に在学中に取り組んだ博士論文のテーマは、意思決定に対する数理的システム理論からのアプローチで、指導教官の一人が貴学会会長も務めた松田武彦先生（元東京工業大学学長）であった関係もあり、OR 学会に学生会員として所属し、生涯初めての論文“Characterization of the Satisfactory Decision Principle”を Journal of Operation Research of Japan に投稿することになりました。論文掲載の諾否が決定されるまでずいぶんやきもきしましたがその分、最終的に Vol.21, No.3, 1978, pp. 347-370 として掲載されたときの喜びにはひとしおのものがありました。この気持ちは今の若い学生の皆さんにも共通のものと思います。今、手元にある論文を読み直すと、気恥ずかしさが先に立ちますが、これによって今の私に繋がると思うと感無量です。

その後、助手時代には機関誌の編集委員を務めさせていただき、特集号の構想・編集に携わるとともに、特集号の執筆を担当したこともありました。中でも、Vol.31, No.6, 1986 では、「集団合意形成支援工学」特集を、Vol.33, No.7, 1988 では「ソフト・システムズ・アプローチ」特集を担当・執筆させていただきました。

特に後者は、1985~86 年に英国ランカスター大学・チェックランド教授のもとでの在外研究のテーマであるソフトシステム方法論をはじめとする、いわゆる問題構造化手法 (Problem Structuring Methods) を多方面から検討できたことと自負しております。最適化や効率化といったパラダイムとは異質の思考方法を機関誌に掲載できたことは、私に英国の Journal of Operational Research Society の editorial board member の仕事をもたらし、また、主として英国・欧州のソフトシステムアプローチの研究者たちとともに米国 Journal of Operations Research of America へソフトアプローチの重要性を集団アピールする行動にも繋がりました。

このように、特集号執筆を契機に内外に研究者の人脉ネットワークを構築することができたことは深く感謝するところです。これにより、FMES や横幹連合に日本 OR 学会選出の委員として参加することになりました。特に、FMES から指名され JABEE のための研修として、米国 ABET の審査方法を視察するために米国マサチューセッツ大学アマスト校を訪問したのは大変貴重な経験でした。

## 2. 期待とエール

私自身に対してそうであるように、特集号形式の機関誌は、間違いなくきわめて貴重でユニークな存在です。そのテーマの広さ、懐の深さ、執筆陣の適切性から、経営科学・経営工学・社会システム工学などに興味をもった若い学徒が、卒論や修論で自らの研究テーマを絞る際など、関連研究領域を俯瞰する際の絶好の情報源です。これから少子化の時代を迎え、若者人口や学生数が減る中、機関誌には、これまで以上に、この分野に興味をもたせそれに取り組む意欲をかき立てるような、刺激的な「研究の道案内」としての役割を期待したいと思います。

特にこの分野に望まれる T 型人材育成にあたって、数理など理論的で厳密なアプローチとともに、社会・組織に目を向けた実践的な方法論とその適応分野を、これまで以上にカバーし解説していただけたらと念じる

次第です。私は、理論・モデルの開発から方法論を提案し、それを適用・実践して、さらにそこから学習して理論を進化させるという一連のサイクルをトランスレーショナル・アプローチ translational approach と名づけ、経営情報学会でもおりにつけ研究アプローチとして強調しております。また、Springer から Translational Systems Science シリーズと銘打った書籍シリーズを順次刊行中です。

日本 OR 学会と経営情報学会は、その興味・関心の

重点に濃淡があるのは当然として、その方向性はともに経営行動への科学的解明という点に向かっているという意味で、互いに補完的な位置づけにあると言えるでしょう。

これからも、この分野の先駆的学会として、次の 60 年に向けて大きな一歩を進められることを期待し、エールをお送りさせていただきます。

このたびは、日本 OR 学会の還暦、誠におめでとうございます。